

欧州ICTレポート

国際会合におけるICTの活用

加藤義行

2018年10月29日から11月16日まで、国際電気通信連合（ITU）の最高意思決定機関である全権会合がドバイで開催された。会合結果は、他の出張者が別の場で報告するはずなので、今回のコラムでは視点を変え、最近の国際会合でのICT活用について記載したいと思う。

私がITUの会合に参加し始めた15年前の2004年頃は、会合文書が紙で配布される時代であった。会場にはビジョンボックスと呼ばれる棚があり、会合参加者の棚には会合のドラフト文書が配布され、毎日大量の文書を仕分けするだけでも大変であった。

その後ITUではペーパーレス化が進み、今では文書はもちろん全て電子化、各国からの寄与文書はITUのWebサイトから事前にダウンロードでき、会合中に作成されたドラフト文書も、即時アップロードされる。

会議場内でもICT化は進んでいる。全権会合ともなれば、参加者は2000名を超え、プレナリー会場はその人数を収容できる大きな会場となる。昔だと議長等が座る演壇には卓上にプラスチックネームプレートがあり、会議のセッションが変わるごとにスタッフが手作業でネームプレートを置き換えていたものだが、今回の全権会合では電子ネームプレートが設置されていた。会議が始まる前にオペレーションスタッフが手元のPC経由でネームプレートの表記を一括で変更し、会議がスタートする。

各国が座る席にもICTが導入されている。通常、発言をする際は、自席のネームプレートを立て、それを見た議長が指名する形をとるが、参加者が2000人を超えると、さすがに議長も確認ができない。今会合では、各自の席に設けられたマイクシステムとオペレーションセンターが繋がっており、発言者はマイクシステムのボタンを

押すことで、自動的に発言者の待ち行列に入る形がとられていた。議長席にはモニターがあり、発言を希望する国が順番に表記されるという仕組みだ。

さらに会場内に設けられたカメラとも連動し、発言中は自動的に発言者が撮影され、会場内の大型モニターに映し出される。マイクにはヘッドフォンジャックもあり、チャンネルを切り替えることによって、国連公用6言語の好きな言語で聞くことが可能となっている（会場内にはもちろん、同時通訳ブースが整備されている）。

さらに同時通訳された英語は、会場内の大型モニターに字幕として表示される。たまにタイプミスも見受けられるものの、精度は高い。会議終了後には、議事録としてもアップロードされる。

今会合に参加した同僚が調べたところ、ITUではStreamtextという外部サイトを活用していることが分かった。驚くべきなのは、その値段である。

参加人数に応じて変動はあるが、50人ほどの参加者の会議で1分あたりわずか10円。500人ほどの会議でも1分あたり30円とのこと。1時間の会議録を600円～1800円ほどで作成してくれる計算になる。ここ最近、国連の多くの会合で、このシステムが活用されている理由がよく分かった。

蛇足ではあるが、今回の全権会合ではAIに関する議論も展開された。結果として新決議は作成されなかったものの、終始活発な議論が展開された。今後、AIが国際会議の場で活用される日もそう遠くはないのかもしれない。

各国から入力された寄与文書を元にAIが決議案を自動で作成……。そんな世界がもうすぐやってくるのかもしれない。

※本稿は、筆者の個人的見解である。

※本コラムは欧州在住の各氏によるリレー連載です。